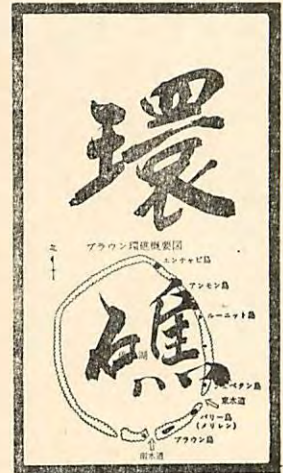


靖国神社神門



マール方面遺族会
(旧クェゼリン方面戦没者遺族会)
〒103 東京都中央区
日本橋人形町1-8-2
電話 03-661-8760
振替口座東京 0-93487 番
編集兼発行人 佐藤宗丕

昭和六十四年

慰霊祭と総会の御案内

会長 佐藤 宗 丕

全国の会員並びに会友の皆様には向寒の折にもかかわらず御健勝のことと存じます。

恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお誘い合せ御参集下さい。

日 時 昭和六十四年二月十二日(日)

午前九時集合 靖国神社参集所

慰霊祭 午前十時 昇殿参拜

定期総会 午前十一時 参集所

△議題 諸報告 会則一部改正 会務計画 予算

役員改選▽

遊就館拝観 総会終了後全員で御祭神の遺品、史料

等を拝観してその清純な精神と御遺徳を偲ぶことと

いたします。展示品のうち本会と関連のあるものは、

「25年のあゆみ」と環礁49号に記載してあります。

※定例の慰霊祭は御家族、御親族の皆様がお揃いで参拜

できるよう二月の第二日曜としております。

同封の私製はがき(料金は本会負担)は慰霊祭に参加しない

方も、必ず全欄御記入の上一月十五日迄にお送り下さい。

慰霊祭、直会旅行への参加申込みの外、「25年のあゆみ」「環

礁合併本第5集」「63年慰霊祭の記念写真」の注文や、会員

名簿の訂正申込み等にも御利用下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきで、一月

十五日迄に本会にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋

で、一泊二食付一人七千三百円の特別価格です。本会が受取った申込みは九段会館に取りつぎますので、申

込後の取消しや変更は直接左記に通知下さい。(以下20頁へ)

目次

昭和六十四年慰霊祭と総会の御案内 会長 佐藤 宗丕……………1

マキンの近況……………山下 治……………2

激戦二十年後の戦跡(2)……………長谷川 敏……………4

タラワの慰霊碑の現況……………「ヤルート戦記」について……………6

……………安東 正夫……………6

黄 塵……………北原ひで子……………8

ブラウン環礁の玉碎(1)……………矢野 雄三……………9

お便りの中から……………鈴木梅太郎・長谷川栄次……………14

……………長谷川 敏・板垣 徹……………14

……………村岡 達志・野村 盛弘……………14

……………山田 雪子・土屋まさ子……………14

……………中山 時野・近藤 章……………14

……………中野フヂエ・松宮 花子……………14

……………諏訪 完三・服部くにゑ……………14

……………水野 はな……………14

会則改正について…………………………16

……………会長 佐藤 宗丕……………16

……………会員名簿訂正(1)…………………………17

……………クェゼリンのチャップマン…………………………17

……………司令官よりの親書…………………………18

……………マールシャル諸島情報…………………………18

……………寄付者芳名…………………………19

……………本部だより…………………………19

マキンの近況

会友 山下 治

曾つて、ギルバート諸島のブタリタリ(マキン)の戦跡を訪れた東京八王子市の永生病院長安藤忠夫先生は「日本軍玉砕の島で慰霊碑のないのはこだけ」と嘆かれ、島の牧師に紹介された栗林名誉領事に所信を述べられた。昨年栗林名誉領事がこの島を訪れた



えられた。

五月二十一日、安藤先生、松尾さん(病院関係)田中さん、新藤さん(会の篤志会員)、横田さん(石川島造船)永井さん(大日本土木)、安達さん(南洋貿易)の外、タラワのキリバス・日本友の会の四人の合計十二名が、資材共々チャーター機でブタリタリ上空を超低空で海底に眠る日本軍機を求めながら、二回旋回して十時五十分、着陸した。

かつての大戦

時、島のタカキア州議長から、武装した日本兵士の銅像を建ててほしいと要望され、関係者協議の末キリバスには乙女が月に昇って幸せに暮しているという伝説があり、この辺りが三保の松原に似ていることから天女の像を、と合意、製作費は安藤先生が寄進し、日本・キリバス友の会から現地へ寄贈することとなった。

で日米両軍の爆撃で多数の犠牲者を出しているにもかかわらず、大酋長初め全島民の熱烈な歓迎と歓待を受けた。島民の日本に対する期待と親愛の情は、戦時中にも増して強くて小学生全員の日本語による「北国の春」合唱とか、勇壮な民族踊り競演の中にも、「軍艦マーチ」「東京首頭」が六十歳過ぎの老人・長老達の指導で披露された。長老達は各部落の長(オサ)になつており、カタコトの日本語で懐かしげに話しかけてくれた。

五月二十二日の英霊碑建立除幕式典は、キリバス、日本両国旗の前で大酋長以下多数の島民が参加し、盛會裡に終始し、地下に眠る千二百余名の英霊のご冥福を祈願致しました。

「北国の春」を二日にわたり合唱してくれた生徒の小学校は、ブタリタリ中央の外海側にあり、大酋長と学校長等から「英霊碑建立を記念して学校名を付けて欲しい」と強く要望があり参加邦人協議の結果を参考に、天女の像に因み「アイネン・カラワ・メモリアルスクール」と命名され、末永く日本との友好をお誓い申し上げます。

見たこと、聞いたこと

- 一、ブタリタリの位置と人口等。北緯三度十分。東経一七二度五〇分。三〇キロ四方位の珊瑚礁で八部落、約三、六〇〇名。
- 二、電灯設備がなく、教会等二、三カ所に自家発電装置(小型発電機)がある。住民は夜、カンテラのようなランプを使用。
- 三、島内に自動車は中古の軽トラックが五両あるだけで、経済的に恵まれていて一部の家にバイクが若干と、プレーキなしの二八インチの自転車を使用している。ほとんどがハダンのんびり歩行している。

四、女性は簡単な服を着用しているが、男性は半ズボン、裸である。ほとんどがキリスト教徒で、日曜日の礼拝には男性もシャツを着用する。儀式

等には、男性は腰巻きのスカートを着ているが、地位階級で色が異なるようである。

五、社会生活の掟、慣習、規則等は厳しく維持されている。踊り等も部落一丸となつて行なわれ、声が小さいとか動作の遅い時には、リーダー、長老等が厳しく指導している。

六、赤道直下ということもあり気温は高いが湿度が低く、しのぎ易い。天水確保の設備がないため、井戸水(海抜一米前後のため、ちよつと掘ると水が出るを使用している)海は良き行水の間でもある。

七、椰子、バナナ、タロ芋、パン(ブリード・フルーツ)、タコ(バンダナス)、魚、貝、エビ(五〇センチもある)等の天然の食物は豊富で、豚、鶏、猫、犬等と、タコ椰子の葉で作った床の高い家(小屋)に、のんびりと明るく大らかに生活している。

八、タラワのベシオ島にも日本軍の大砲、トーチカとか、米軍の上陸用舟艇、撃墜された飛行機の残骸等が未だ無数に散乱しているが、ブタリタリにも内海に二式飛行艇が生々しい姿で座礁しているほか、ドラム缶に砂を詰め掩体とした機銃陣地とか機銃台座、干潮時には日の丸が鮮明に確認できる、という日本軍機等四機(田中さんと私は二回目訪島の折、漁船で現場海上に行つたが潮位の関

係で残念ながら三米位下の遺影を
 拝んだだけでした。その他、米軍
 機、赤錆びて座礁している英船の残
 骸二隻、また日本の永田丸も沈んで
 いるとか。椰子等の繁茂する島陰に
 もコバルトブルーに輝く波静かな内
 海にも、四十五年前の激闘を偲ぶ遺
 物は限りなく散見されました。ブタ
 リタリに居住している六十歳前後の
 人達は昭和十七、八年頃、日本軍に
 協力し以前から島を統治していた英
 人に反し、皮膚の色が同一の日本人
 に親しみと好意を持ち続けており、
 今でも私達を「コンパニー」(友達)
 と呼び懐かしがっている。

* 当時の人で今知り合った方
 々は、次の通りである。

シートニ・タカニコ(六十歳)

T I T A N E ・ T A K A N I K O

教会前の内海近くに居住、ブタリタ
 リ診療所に勤務する女医さん。五月二
 十二日、英霊碑除幕のセレモニーの時
 私の所へ来て「一四空、八〇二空？」
 と問いかけてきた。会話の中に、「二
 式、九七、一九空、九五二、警備隊、
 航空隊、潜水艦」とか、「有り難うご
 ざいました。どういたしまして」等の
 上品な日本語も使い、「山下少佐どう
 した、元気か？」の質問に「当時の八
 〇二空の士官は全部戦死した」と答える
 と、涙を流しました。シートニさんの
 弟の名前は、昭和十七年八月米軍潜
 水艦二隻の奇襲攻撃でマキンが占領さ

れた時、守備隊長で戦死した金光兵曹
 長の名を付けて、「カネミツ・タカニ
 コ」であり、奥さんは診療所の受付兼
 看護婦のようです。

トアナ・ケープ(六十二歳)

T A O N A ・ K I E B U

教会付近に居住、八〇二空整備科・
 星川武さん(本会会友・静岡県湖西市)
 が当時、洗濯等でお世話になった。贈
 呈品をお届けしたところ非常に感激さ
 れ、家族一同で歓待してくれた。

キボ・K I B O(六十歳)

ブタリタリ在住、八〇二空炊事の手
 伝いをした。五月二十三日お別れ会の
 会食時に私達の訪島を聞いて出席し、
 「日本兵隊、いつもいつも椰子持って来

い、と言った。椰子持って行くとタバ
 コくれた。沢山」と日本語で言い「昔
 々おじいさんとおばあさんいた、おじ
 いさん山に柴刈りに、おばあさん川に
 洗濯に行った、おばあさん川で洗濯し
 ていると、上の方から桃流れてきた、
 拾ってきた、切ったら子供生れた、桃
 太郎と名つけた。」とたどたどしい語
 調で語り、席上の皆を感激させた。私
 が一四空主計科の清水、船岡、加藤、
 木村の質問に「船岡知ってる。あと忘
 れた」との返事があった。また通信科
 が一キロ発電機の整備(オーパーホー
 ル)の時、何回か手伝ってくれた香港
 の電気学校卒業の青年の事を質問した
 ところ、中国系でアタウエヤ・フーン
 さんで、フイジーに電気技師でいる
 旨の返事を受けた。

ナマラ・N A M A R A(六十歳)

タラワ在住、一九空(九五二空)で
 働いた。私が二回目ブタリタリに行く
 ため五月三十日、航空券のチェックに
 航空事務所に行ったら話をしてきた。
 私が八〇二空だ、と言ったら、二式飛
 行艇か、と日本語の返事があった。五
 月三十一日、タラワ空港からブタリタ
 リ空港までカタコトの日本語の会話を
 交わしたが、ブタリタリに降りないで
 リトルマキンに行かれた。出身地はブ
 タリタリである。

ビオ・アンテリヤ(六十歳位)

B I O ・ A N T E R E A

リトルマキン在住、六月六日、一八

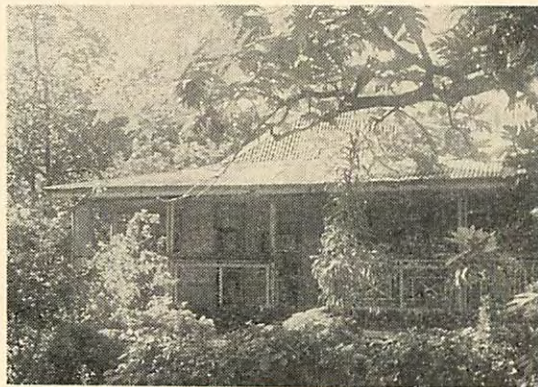
〇〇頃(現地時間)タラワの戦跡探訪
 も最終日となり、慰霊公園の柵外を別
 れを惜しみながら散歩し、園内に咲い
 ている花は南洋桜、ハイビスカス、プ
 ーメリヤ、カイパン、夾竹桃と数え手
 帳にメモしていたら、「日本人か」と
 後ろから肩を叩かれた。「タラワに居
 たN A K A K A W A 小隊長・中川小隊
 長」と連発してきた。私は返事に困り
 田中さんのところに同道した。田中さ
 んの話では、「タラワでは中川小隊長
 と一緒に居た。良く知っている」との
 ことで、現在ビオさんはリトルマキン
 に住んでおり今日タラワに用事で来
 ました、とのことで固く握手してお別れし
 ました。

ウキアングン・

U K I A N G A N G ・ の部落の人達

は特に好意的であった。六月二日、田
 中さんと私のため部落民全部でマニア
 バ(集会所)において、食事と踊りの
 歓待をしてくれた。踊りのリーダーを
 勤める長老は、母を米軍機で亡くして
 おる六十五歳位に見受ける方で、軍艦
 マーチ、東京音頭を最後まで歌った。
 他に六十歳位の婦人は東京音頭を身振
 り手振り上手に踊り、部落民からも大
 喝采を受けていたが、名前を聞く機会
 を失してしまいい残念であった。

ウキアングンは米軍が最初に上陸し
 たブタリタリ西部で、外海側のジャン
 グル内には日本設営隊の使用した碎石
 機が赤錆びていた。(63・6・10)



当時の面影を残す唯一の建物
 八〇二空本部士官室

激戦二十年後の戦跡 (2)

篤志会員 長谷川 敏

前号ではマーシャル群島のクエゼリン島について述べましたので、本号ではそれ以外の島々について記します。

1、ルオット島(ロイ島)

昭和33年、クエゼリン島に寄った時同じ環礁の北の端、ルオット島に米陸軍の人工衛星の電波観測班が来ているということを知った。私達の仕事と幾分かの関係がある。そこで、ある日、私達は小船を出してルオット島に見学に行った。

その頃のルオット島はまだ全く基地化されていなかった。米陸軍の観測班は中尉をチーフとした五名で、数か月間の滞在予定であるという。電波観測用のアンテナは、勿論、屋外にあったが、観測室や宿泊室には古い頑丈なコンクリートの建物を使っていた。彼等はこの建物について、「日本軍が使用していたものだ。非常に堅固にできている」と彼等の先輩の苦戦を偲ぶかのように説明していた。この建物は、四角な大きい土蔵のような感じで、出入口が広く作られており、内部は二部屋(?)に仕切られていた。日本軍の司令部であったのだろうか。改めて見廻すと、頑強な重厚な感じのするコンクリートには、幾多の弾痕が見受けられたが、建物自体はビクともしていな

かった。ただ内部が少し破損していたが、これは後で整理した時に手を加えたものだろうか。彼等は手前の部屋を観測室に、奥の部屋を居室に使い、人工衛星の打ち上げに備えていた。

今思うと、この建物の写真を撮っておかなかったことは返す返すも残念であった。また、島内を歩き廻って戦跡を探さなかったことも悔やまれる。

その晩、私達はこの建物の中で泊まった。炊事は観測をしないチーフの持ちとのことで、夕食には中尉殿の作った焼肉などを御馳走になった。食後、一人の兵士が弾いてくれたクラシックギターは今でも忘れられない。実に上手で私達はアンコールを連発した。それにしても、この島の英霊達は、この日米交換の有様とギターの音色を如何なる思いで聞いたであろうか。

因みに、私も次の南洋出張からはギターを買って持ち回るようになったが腕前の方はサッパリで、専ら島民達の愛用物となってしまう。

昭和38年に私がこの島に寄った時には、島の様子は一変し完全に米軍の基地と化してしまっていた。島の中央には、椰子の木々の上から辺りを圧する巨大なお椀形のバラボラアンテナが建

日本の戦闘機の残骸がタコノ木などの繁みの中に。マロエラップ・37年2月



ち、海岸近くには五、六基ほどのミサイルが入道雲をにらみ、滑走路では双発機が離着陸をくり返していた。

また、隣接している島々との間の浅瀬には、ク近寄るべからずという英文の掲示板が建てられて、ルオット島はクエゼリン島よりも一段と基地化され、厚いベールに包まれてしまった。

2、クエゼリン環礁の他の島々

クエゼリン環礁中でも、エヌブジ、エラー、ガガン、エバダンなどの小さな島々には、彼等の兵器の残骸が激戦の記録を留めるかのように未だに残されていた。

海中から船首だけを見せられている船、米軍のらしい水陸両用戦車、カニの遊び場となっているトーチカ、米軍が使

つたらしい鉄製の橋、砂浜から突き出した機関銃、船体からはずれたスクリーン等々が、どっかと腰を降ろして20年間の波浪に耐えていた。

3、マロエラップ環礁タロア島

米軍はギルバート群島の占領後、マロエラップ環礁等を素通りし、一路、クエゼリン環礁に向かったという。従って、この環礁では上陸による攻撃は受けなかった。

さて、且つての日本軍の飛行場跡は、一面に荒れるがままであった。コンクリートの旧滑走路にはあちこちに亀裂が生じ、名の知れない南洋のつる草が伸び放題に伸びて縦横にはい廻り、所々にはタコノ木も茂っていた。大きな格納庫の屋根板は殆ど消失してしまい、むき出しになった骨組は折れ曲っていた。

旧滑走路のすぐ側のコンクリートのない所は、胸の高さ程の草むらとなっていた。その草むらを分けて歩き廻ると、草やタコノ木の葉などの隙間から飛行機があららに一機、こちらに二機と姿の一部だけ現わした。この広い跡地に何機残っているのか見当はつかないが、認められただけでも20機はあつたらうか。からんでいるつる草を払うと、今にも草原を分けて飛び立ちそうな完全に近い外形を現わしたのもも少なくなかった。双発の爆撃機(?)もあつたが、大半は単発機で零戦と思われた。終戦時には飛べる状態であつた

だろうに……。私には、飛行機たちがいつか同胞が訪れてくるのを待ちくたびれているように思われた。

この他、司令室だったのだから、礁湖側の椰子林の中にはコンクリート製の大きな建物があった。銃眼よりもはるかに大きな、窓らしい穴がついており、そのため内部は明るい。そのガランとした室内には壊れたモーターや整流器らしきものなどが転っていた。

また、外海側には海岸線に沿って長々と高さ一米程のコンクリートの防塁が築かれ、所々にトーチカが置かれていた。且つては堅固に海岸を固めていたこの防塁も、主な最後の長い歲月の間にあちこちが傾き、寄せる波に洗われていた。

隣の小島の砂浜には、大型の飛行機がその残骸を炎天下に晒しているのが遠望された。望遠鏡で眺めてみると壊れた胴体には大きな星と白い帯のマークがハッキリと見えた。南洋の島々を廻って、このマークが残っている残骸を認めたのはこれだけである。

4、ブラウン島

ブラウン島はエニウエトック環礁の本島で、現在はエニウエトック島と呼ばれている。昭和21年からの米国のビキニ環礁での核実験の後、この島は昭和29年より水爆の実験場となつてしまつた。従つて、この島へは誰も行くことは出来ない。本文では他の島で聞いたこの島の様子をお伝えしよう。

エニウエトック環礁から一番近い環礁にウジェランという小さな環礁がある。近いと云つてもエニウエトック環礁から西南へ二〇〇km近くの距離がある。その本島のウジェランという細長い島に、元から居る島民達とエニウエトック環礁から強制移住させられてきた島民達とが別々に生活していた。小さな環礁に大勢いてはタロ芋やパンの実、魚などの主食が充分でないなど、いろいろと大変らしい。特に、移住させられて来た島民達は望郷の念やみがかたく、遂に、最初の実験から二、三年経つた頃、何人かがこっそりとカヌーでエニウエトックへ様子を見に行つたが、しかし島はメチャメチャに変形し、椰子の木など全く無くなつてしまひ、とても住める所ではないと驚き悲しんで戻つてきたとの話である。

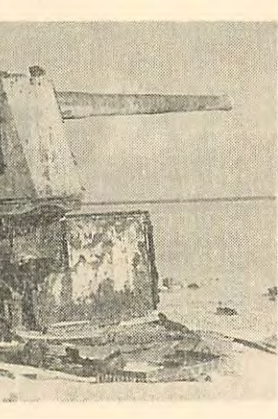
なお、エニウエトックは他の環礁と離れているし、住民は当時46名と少なかつたので実験場選ばれた、とある本に記されていた。

話は余談になるが、昭和33年5月だつたか、私達がエニウエトック環礁から三五〇km程東南に離れたウジャエ環礁の無人島に滞在していた折、ある朝方、突然、曇天の西の彼方からドロロンという遠雷を重くしたような響きを耳にした。普段は、近くの浜に寄せては返す波の音や遠くのリーフにぶつかる力強い波の音しか聞こえない島である。その聞き慣れない音を聞いた瞬間、私達は「やったな！」と緊張し顔を見合せた。その頃は核実験の期間中であつた。この辺は危険区域外の筈だがと、その夜を待つて日本からの短波放送にダイヤルを合せると、果せるかな「今朝、エニウエトック環礁で……」とのニュースがあつた。報ぜられた実験の時刻もほぼ同じであつた。

それからは私達はスコールの黒い雲が近づくと、慌てて頭を蔽つてテントに駆け込んだ。魚を常食とし、多くの島々で雨水を飲用しているマーシャルの人達には核

実験の影響は深刻である。以前、ヤリート環礁にいる時その島民から、ある島の人達の頭髪が抜けたという話を聞いた。また、マーシャルの指導者で、当時はミクロネシア議会の議長や教育行政官等であつたドワイト・ハイネ氏（島民は尊敬の念を込めて彼を専らツォアイと愛称で呼んでいた）や当時の若い酋長アマタ・カブア氏は米本国へ抗議と補償の要求に行つた、とも聞いた。これを話してくれた島民は「ツォアイ達は無事に戻つて来ないかと心配したヨ」と彼等の勇気を称えていた。

間、私達は「やったな！」と緊張し顔を見合せた。その頃は核実験の期間中であつた。この辺は危険区域外の筈だがと、その夜を待つて日本からの短波放送にダイヤルを合せると、果せるかな「今朝、エニウエトック環礁で……」とのニュースがあつた。報ぜられた実験の時刻もほぼ同じであつた。



外洋側のアームストロング社製の刻印のある20cm砲、シンガポールより移動した由。ベシオ島・37年3月

5、タラワ環礁ベシオ島

私はギルバート群島のタラワ環礁とマラケイ環礁の島々を昭和39年2月から4月まで転々としたが、そのうちベシオ島には3月2日から7日までと4月2日から8日までの2回程、滞在していた。

当時、この小さな島の至る所にコンクリート建物や大砲、高角砲等の残骸が残つており、英国と豪州の人達や島民達はこれらの隙間に家を建てて生活しているという感じであつた。更に遠浅の海には飛行機、戦車、舟艇、バリケード台等の残骸が潮が干くにつれて次々と姿を見せていた。

建物については、無数の弾痕を受けながらもビクともしていない司令部跡と最近まで島民に使用されていたといふ発電機のある電源室のことを16号で

詳細に述べた。その他のコンクリートの建物の残骸としては、まず、散在している大砲の側にある建物は弾薬庫であるうか。その多くのは屋根がカマボコ型に丸く、出入口が一つだけであった。次に、四角な建物で、出入口が一つと上部に小さな空気孔らしいものが三つ四つあるのは食糧などの倉庫であったのだろうか。また、高角砲の近く、土砂を詰めたドラム缶がぎっしりと屋上に並んだ建物はその砲の指揮室だったのか。更に、半地下式になっていた銃眼が三つ四つあり、かかんで四、五人位入れそうな小型のものも二つ三つあった。(以下次号)

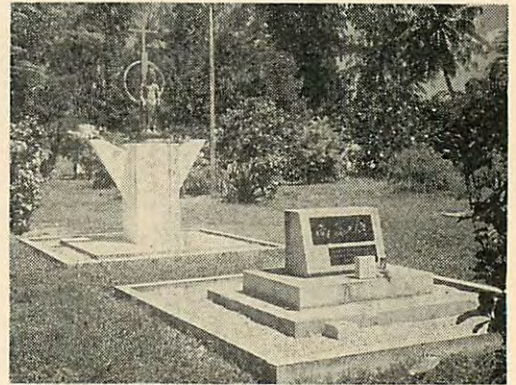
タラワの慰霊碑の現況

環礁48号15ページに、お知らせしました慰霊碑の写真が届きましたので掲載致します。

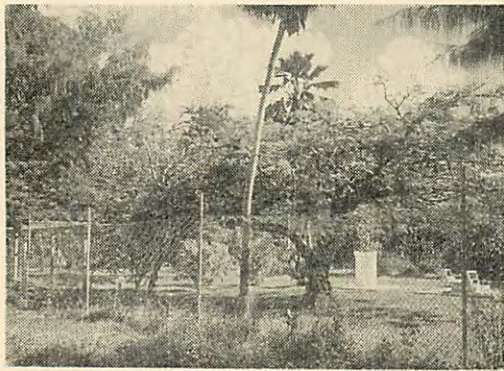
☆今迄ビールの空かんで周囲をかこんでいたものをこの写真のようにキチンとコンクリート枠でかこみ中に碎石を敷いて整理致しました。

☆公園の周囲全部を高さ2mの金網塀でかこみました。出入口は大小二カ所あり、その鍵はベシオ役場が保管しており、いつでも参詣出来ます。

左側に見える日除けと腰掛は金網塀の外側となっております。木蔭で涼しいのでバス停を兼ねて住民の憩いの場のようになっています。



南瀛之碑とマリア観音



全 景

「ヤルート戦記」について

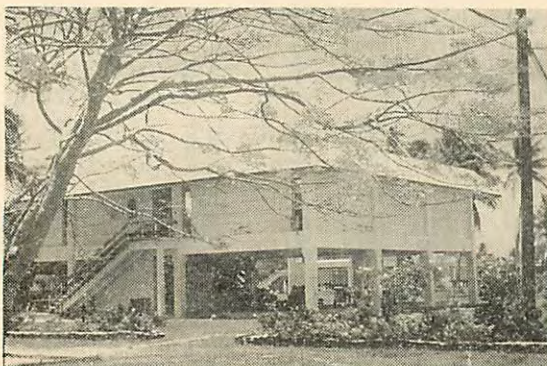
安 東 正 夫

旧南洋群島の中で最東端に位するマーシャル群島については情報が少なく、実情の分からないことが多い。私も一昨年にようやくマジュロ島までは訪ねることを得た(南洋群島協会報に一五六号から連続寄稿した)が、日程等の関係で断念してしまったヤルート島は、間接的に多少の近況は知ったもののなお少年時代この方の遠い存在である。

大戦末期においてマーシャル群島のクエゼリン環礁はじめ幾つかの島々で持久した所でも空襲や戦病死(飢餓)によって過半数の将兵を失うという悲惨な中であって、唯一、ヤルート環礁(主にイミエジ島)だけが最小限の被害で堅持し切ったのは大きな慰めであり、またその事情については不思議なことと思っていた。マジュロの博物館にヤルート終戦時米軍との初接触の時の写真が展示されているのを見ても、日本陸海軍人の表情や軍装がまるで内地の平時の如くに清明に整っていたのも、奇跡のことと印象に残っていた。

実はこの協会報のお蔭で、マーシャル方面遺族会の佐藤宗不会長と、この方面に通じておられる牟田清氏からお

教え頂いて、その謎が一部解けかけてはいた所、幸いにも求めていた詳しい戦記が入手でき、ようやくはつきり分かってきた。それは陸海軍の「ヤルート戦友会」編集で五十余名の従軍生存者や遺族方の共同執筆による四〇〇ページ弱の大冊、「ヤルート戦記」その苦闘と鎮魂の書」で、ヤルート戦の経緯が諄々と豊富に語られている。出版社(黎明書房)が名古屋であるせいも



マジュロの博物館

あり、なかなか手に入りにくいのが惜しいことであるが。

やはりヤルトでも昭和十九年二月のクエゼリン、ルオット両島玉砕後は孤立無援に陥ったばかりか、以来一面積当たりの爆弾量では全大東亜戦を通じて最大というほどの激烈で執拗な空襲を受けている。それでも結局米軍が上陸して来なかったのは、もちろん運というところもあるが、ここに結集した陸海軍約二千名の勇戦防衛が強靱なために敬遠されたこともその因であらう。(それはラバウルやトラックと同様である。)

ヤルトの場合、殊に本来は他の島々に配置されるべき陸軍兵が、戦況や海上輸送の事情のためにヤルトに留まって守備に就いていたことが、この戦記でも知られる。こうした兵力の混成は相当地にマイナスのはずであったのも、よく克服されている。

その原動力であり前記希有の軍律が維持されたのは結局、人にあつたと思ふ。陸海軍最高指揮官の升田仁助海軍少将(終戦後、自決)と古木秀策陸軍少佐(健在)の人格と先見の明にあらずかる所は間違いない。古木少佐の賢策によって、計画的に環礁全体に屯田兵のように兵を配置し、島民の協力を得て、椰子の実、椰子蜜(チャカロ)、パンの実や魚類を収集、舟艇を確保し、公平に分配している。火器分散と統一運用に成功している。

や弾薬が計画的に使用されたことは言うまでもない。これによって、イミエジ島自身が廃墟になった後にも、なお戦力が枯れることがなかったのである。こういうお蔭もあって陸海軍の協力は円滑に、軍律は最後までよく維持されて、理不尽な暴力や退廃も殆どなかったという。

ヤルト島の地勢や条件がマーシャル群島や近隣の他の諸島に比べて別段に有利ということもないにもかかわらず、こうした抜群の成果を生んだものは、重ねて最高指揮官の人格と能力の賜と、全島将兵の戦友愛と一致団結にあつたことが、この戦記によくうかがわれる。

マーシャル群島へ行った方はお分かりのように、島々はサンゴ礁の隆起から成って低平で細長く、深い壕を掘ることもできず、大きな爆弾や砲弾でも浴びれば島全体が吹き飛んでしまいそのうな位に心もとないものである。それに主食の足しになるような作物の農耕にも殆ど適地はない。そういう島に孤立無援で生き抜いて、なお戦うというのは、さぞ困難を極めたことであつたであらう。

実際に絶大な苦勞をされた陸軍の古木氏が海軍の升田少将を真心こめて敬慕されており、その升田少将はこのような功績にもかかわらず、いわゆる「戦犯」問題(撃墜米兵の処刑)の責任を一身に負って、終戦手続きの終了

後に従容として自決されている。—こういう事例は他の地域にもあるにはあるが、ヤルトにおいてひときわ清冽の感がある。

このように、四十余年前、南洋群島の最東端の小島において、実に全戦域の中でも至高のヒューマニズムが示現されたことによって、升田少将一人の尊い自己犠牲と引き換えに、今日健在と考えられる二千名近くのヤルト従軍者や一般邦人、また多くのその遺家族のその後の人生において、ヤルトへの思いが温かく励みになるものであるのは本当に幸いなことである。

戦後は米軍によってマーシャル群島の首都がマジロに移されてしまったために、ヤルトは交通も不便なままに閑疎になった。これは日本人の感情としては寂しいことではあるが、このためにかえってヤルトは昨今のサイパン島やグアム島のように世俗化するのを免れて往時のイメージが温存され、玉砕のなかったという心安さも手伝って、もしかしたら、「酋長の娘」の夢さえ今に残るかとの想像さえ許してくれている。

(南洋群島協会報一六六号から転載)

追記一 (昭和六十三年八月)

同じマーシャル群島ウオッセ島守備隊司令であった吉見信一元海軍少将が九十三歳で亡くなったと報ぜられた。ウオッセ島には初めはヤルトよりもずっと多くの兵力と施設隊員があつた

のが飢餓等のために三分の二近くが斃れるという悲運に遭っている。(ただ陸海軍の戦病死者に較べて設営隊員の損害が最も少なかったことは、この島にも軍律とヒューマニズムが健在であつたことを思わせるが。)吉見少将は戦後にその重荷を背負って、医師に転身して後半生を全うされたという。

そのことは又一面で、ヤルトでの大成果がどれほどに稀有のことで貴いものであつたかを証すると言えようか。……この「環礁」誌を拝読しても玉砕された島々の運命は真に痛恨である。ヤルトにあつては、その運命の一部は確かに指導者の知恵と誠意によって拓かれたが、玉砕将兵が本土だけでなくヤルトをも身を以って護つたことは申すまでもない。

追記二 (昭和六十三年十一月)

天皇陛下が本年の戦没者追悼式に御病身を押し御臨席なされた時のお姿が、今胸に熱く迫る。それを厚意にお気の毒だったという人もあらう。しかし私は、あれでこそ良かったのだと敢て思う。大戦では国民の多くも絶大の犠牲を払い、その痛みは今日に連なっているのは事実である。陛下が御自身のお力の限り、いやそれを超えてでも国民をいたわろうと尽されることこそ、正に皇室御本来の美德であり、万世に生きる感動であると考えて、陛下には謝念を込め御平癒をお祈りしているのである。

黄 塵

埼玉県 北 原 ひで子

満州(現中国東北地区)の奉天(瀋陽)は、この数日西南の風が吹いている。この風に乗って遠く蒙古の砂漠から砂塵が運ばれてきて黄色い土煙となり、山も野も街も覆っているが、この黄塵は満州の春の前ぶれである。

北原 百次郎・18年6月1日横須賀で



大和区雪見町十号。この満鉄社宅は私たちが住む所で、隣組が十二戸からなり、赤煉瓦の平屋建て四戸を一棟として三棟を合わせて一班としている。昭和十八年四月。戦争は次第に泥沼へとめり込んでゆく中で、満州国はこの年には建国十周年(康德十年)を迎え、五族協和の旗印のもとに目ざましい建設と開拓が続けられていた。在満日本人も内地と同様に非常時だ、新体制だと言いつつながら、国策に沿って満州の発展につとめていて、侵略などということは全く思いもよらなかった。

招 集 令 状

真夜中であつた。激しく玄関のドアを叩く音に突然眠りを破られた。

「何かしら、この真夜中に」と思いながら、起き上がって小窓を開けると、玄関に人影が見えて手をあげて呼んでいる。急ぎ玄関のドアを開けると、相手の差し出したものは電報であつた。開けて夫と共にあふたと見入る。

「ジュウインシヨウシユウメイゼラル

二九ヒ ヨコスカカイヘイダン」

それは招集令状であつた。郷里の町役場から発信されたウナ電である。昭和十八年四月十日。かねてから覚悟はしていたとは言え、やはり衝撃は大きく、夫と共に激しいものを感じた。

誰か故郷を想わざる

戦地からの第一信。「軍事郵便」「検閲済」という捺印がある。差し出しは「横須賀局気付ウ八六、ウ九一」となっている。遠い戦地からの便りである。

○月○日

妻よ、今日も元気だ。いよいよ前線へ来ました。戦線よりの第一信です。その後皆元気ですか。出発前に便りが

なかったもので、誰かに変わったことでも出来て、手紙を書く暇がないのではと思いつつ、大洋を乗り出して来まして。敵潜水艦の彷徨する南海に乗り出して男子の本懐この上なし。艦上ありても晴れ晴れとした心地であつた。涯なき大洋は、青々として平和そのものの感あるも油断できない。大洋至る所戦場だ。戦いの真つ最中だ。故国離れて何千里、君も知る広い戦場だ。南海特有のスコール、現役当時のこの話は君にもした事があるね。そのスコールに対する珍風景を再び味わいつつも椰子と共にその恵みに浸りつつある。大いに頑張るつもりです。而しいつも君のこと、子供たちの健やかならんことを祈っている。「誰か故郷を想わざる」です。

今日も元気だ。また書ける。妻よ我が子よ皆元気であるや。大陸もさぞ暑いことと思われる。子供たち、黒くなっているだろうか。任地からの第一報一届いただろうか。今日は第二報だ。母港出発以来、日浅きため其方よりの便りは見られないが、必要なことは二度三度書いて貰いたい。大体通信すべき人には、この度の任地のこととは知らせて置きました。無事到着するや否やは致し方ない。海上遙かに渡る郵便だ。戦時下なればなりだ。入隊以来すでに三カ月が流れ去った。全く変われば変わる我等が身の上だ。其の間様々な道を経て今は斯様に遠くまで来ている。

妻へ

夫より

○月○日

△以下13頁へ▽

ブラウン環礁の玉砕 (一)

矢野 雄 三

大東亜戦争たけなわの昭和十九年二月下旬、中部太平洋上に浮かぶ一つの重要な戦略拠点、米軍の手中に陥ちた。同年初頭、北辺の地・満州から遙か南海のこの離島に送り込まれたばかりの陸軍一〇旅団主力(約二、七〇〇名)は、上陸後わずか数週間にして、一艦一機の来援もなく、圧倒的な敵先制力の前にあえなく全員が玉砕、在島中の海軍・航空部隊将兵、軍属、民間人労務者(計七〇〇名)もこれと運命を共にした。

それは、陸海作戦指導部の混乱と亀裂が生んだ余りにも虚しい犠牲であった。しかも、その玉砕の事実については報じられることなく、長らく「無名戦士」のまま葬り去られることになるのである。悪夢のようなこの悲劇の「実相」を知る人は、今日なおきわめて少ない。

はじめに

昭和五十六年三月初め、母シヅ宛に一通の書状が届いた。

差出人の佐々木勝吾氏という御仁にはまったく覚えがなかったが、内容は昭和十九年初頭の中部太平洋戦線に散華した、ある『満州独立守備隊』の慰霊碑建立に関するものであった。

趣意書には、こう述べられていた。

『当部隊(満州第八〇五部隊)は、曩に北支事変勃発に際し、堤支隊として出動、迅速果敢なる作戦行動により大戦果を奏し感状第一号を授与され、昭和十四年にはノモンハン戦においてソ蒙軍を包囲殲滅し、軍唯一の大戦果を挙げた武勳赫々たる伝統を有する部隊である。』

大東亜戦争熾烈なるにおよび昭和十八年

十一月、満州国白城子において軍令により「海上機動第一旅団第三大隊」に改編され、南方トラック島に派遣、次いで翌十九年一月、マーシャル群島ブラウン環礁に主力をルオット島に一部を分散上陸する。

これらの地は珊瑚礁にして地勢不良、戦間に不利なるも万難を克服して陣地構築、最前線防衛に従事中、二月二十日米軍は猛烈なる砲撃の後、同島に上陸するところとなり、爾後熾烈なる戦闘に入る。

二月二十四日、旅団長西田祥實少将、部隊長矢野俊雄大佐を先頭に最後の斬り込みを敢行し、全員「玉砕」したものである。この度、遺族及び在満中の部隊縁故者相計らい、戦没将兵の英霊を顕彰し、後世に伝える為、碑を建立する。

(慰霊碑建立 世話人一同)

——補足として、①自分は、部隊の南方派兵直前まで副官として部隊本部に勤務した佐々木中尉(のちに大尉)であること。②同部隊配属の故・黒部茂雄軍医大尉の未亡人から、南方で玉砕した部隊将兵の英霊を祀る慰霊碑建立の提案があったこと。③右の全員玉砕はその壮烈さにおいてそれ以前の離島玉砕に比肩するものでありながら、戦局利あらざる時期のため報道もなく戦後も、一般に知られることなく打ち過ぎてきたこと。④部隊碑の建立予定地の周辺には、すでに各種部隊の碑が数多く建っているのに、碑建立に最も相応しく、かつ第一番に建つべき部隊の碑は、生生存者無きが故に建てること叶わず今日に至ったこと、などが述べられていた。

そして、遺族の心情を想い、部隊の縁故者数名と遺族中住所の判明している者数人が世話人となって遺族関係者を調査、連絡のうえ、その賛同を得て碑を建立すべく準備に着手したとあり、最後に、部隊長遺族の同意と協力を求める言葉で結ばれていた。

名状し難い感動にかられた私は、早速、佐々木氏にお会いして積極的な協力を約し、黒部未亡人ほか現地世話人の方々との会合の日取りも決まり、五月三日午後には、建立予定地とされる「三ヶ根山」(愛知県幡豆郡幡豆町)の頂上付近に立っていた。

この国定公園の一角は、すでに各種

部隊の慰霊碑、観音碑、供養塔などが立ち並び聖域として知られている。しかも建立予定地は、東条英機大将以下七士の霊を祀る「殉国七士之墓」の参道側南面に位置し、三河湾を眼下におさめ、遙か中部太平洋を望む絶好の立地といえた。話は急速調に進み、翌四日には碑石の選定も終え、十月十八日を除幕の日々と決定した。

夕刻、再び三ヶ根山上に立った私の胸裡にはさまざまな想いが去来した。

——旅団主力が送り込まれた『ブラウン環礁』は、ここから南東へ約三五〇〇軒、マーシャル群島の西北端に位置する直径約二八キロの不正円周形の環礁であり、群島中第二の礁湖を形成し、短小な椰子林に覆われた大小約四〇の平坦な珊瑚砂礫の島々から成る。米軍では、南東端にある環礁中最大の島エニウエトクの名を取って「エニウエトク環礁」と呼んでいた。

そして、この一離島の失陥こそは、わが陸海作戦指導部の混乱と亀裂の象徴であつただけでなく、その後のわが敗勢を決定づける重要な転機ともなるものであった。

だが、それまでの私は「戦史」研究とはまったく無縁であり、関心も稀薄な部類に属していた。ブラウン玉砕に関する認識の点でも、後に掲載する第一復員省(当時)発行の『死亡認定理由書』に記載された範囲を大きく出る

ものではなかった。

しかし、戦後二十余年も経った昭和四十三年三月、はからずも戦没者叙勲の名で「勲二等旭日重光章」が亡き父に贈られたとき、何かある得体の知れない感情が私を突き動かすのを、感ぜずにはおれなかった。

以来、心のどこか片隅には絶えず、父を含めて多くの守備隊将兵が無惨にも玉砕した『ブラウン環礁』への人知れぬ想いが、点滅し続けてきたことは確かだ。

米軍による大規模な放射能除去作戦を特集した『アサヒグラフ』（五十三年十一月六日号）の報道は、さらに衝撃的だった。

ブラウン環礁が戦後、米軍による原水爆実験の島々に姿を変え、かつての守備隊を襲った何億倍もの破壊力が、この離島を文字どおり、死の島々へと化し、平時においてすら人間の生存そのものを拒否し続けていることを知ったとき、——そして、満州第八〇五部隊主力が玉砕した「エンチャビ島」には『今後少なくとも一〇〇〇年は人類の生存が不可能だろう』という米国防総省原子力局員のコメントに目が及んだとき、私の血は大きく騒いだ。

あの戦争の渦中では、まさに想像に絶する苛烈な米軍の砲撃に曝され、戦後もまた米軍の手で、死の兵器の実験場に供されるとは、何たる悲運な「人間集団」といふべきだろうか。

——戦後のその巨大な破壊力によって遺骨の最後の一カケラまでも灰燼に帰した、この悲劇の環礁に馳せる想いは、これを機に急速に高まっていた。

だが、初めての遺族との出会いや、慰霊碑の建立というこの思いがけない導火線がなかったならば、その小さな火ダネも、半ば永久に不発に終わってしまったのかも知れない。

帰京後、私は、多忙な仕事の合い間を縫って古書・新刊書を問わずブラウン玉砕に関わる資料の収集に走り回った。除幕式当日までに、部隊が玉砕に至る概要をとりまとめ参集の遺族にお知らせすることが、この離島防衛戦を戦った守備隊長として、直接千数百の人命を掌握しつつこの世を去っていった亡き父の霊に代わって、遺児たる者のせめてもの務めと感じたからだ。

幸い、防衛庁防衛研究所の戦史部には陸士同期（六〇期）もおり、また先輩方のお力添えを得て、貴重な資料も目を通すことができた。

それにしても玉砕発表が差し止めの後遺は、戦後も長く尾を引いていた。

レポートの作成が進むにつれ、戦時中、軍部によってこの離島玉砕が秘匿され続けた爪跡がいかに大きなものであったかを、改めて痛感させられた。

同時に、ブラウン環礁を血に染めて

散華した「陸軍部隊」の存在が、『海上機動第一旅団』というその部隊名とともに、ともすれば見失われがちであり、長年にわたっていかに誤認と混同の犠牲となってきたかを知って、驚かされた。

山上の碑は、予定どおり完成した。とはいえ、世話人の方の懸命の努力にもかかわらず、大多数の遺族は所在すら確認できず、除幕式当日の参列者はかつての将校関係者が殆どであった。

せっかく作成したレポートも結局はわずか十数部が配布されたにすぎなかった。消息すら不明な大多数の遺族の人たちとは、ついに意を通ずることなく終わるのかと思うと、心中甚だ忸怩たるものがあつたことは否めない。

——慰霊碑の建立から七年、そのレポートも、折にふれてかなりの添削が加えられた。このたび『環礁』誌にあえて寄稿の筆を執ったのも、それが亡き英霊に対するささやかな鎮魂譜になればと願うからである。

知られざる玉砕部隊

ところで、当時、埼玉県朝霞町にあった陸軍予科士官学校の区隊長室に呼び出され、私が父戦死の最初の報に接したのは、昭和十九年六月下旬のことであるが、戦時中は遺族の手許にも、その真相を知る手がかりは何

一つなかった。

『内報 遺族ニ知ラセユ、大佐矢野俊雄二月二十四日南海ニテ戦死ス、東二三長』という簡単な母宛の内報電文（同月二十日付）が届いた後、二十七日には陸軍省発表が新聞各紙に掲載されたが、それでも『今般敵反攻撃滅の第一線部隊指揮中凄烈護国の鬼と散った西田祥實少将、矢野俊雄大佐に対しそれぞれ進級の御命を拝した。西田中将、高知果出身、矢野少将、愛媛県出身。第一線部隊長として出動中、昭和十九年二月二十四日戦死』とのみ、報じられたにすぎなかった。

その後、東部第二十三部隊長名で送達されたマル秘の『戦死公報』（八月十五日付）にも、『陸軍少将矢野俊雄昭和十九年二月二十四日、中部太平洋方面ブラウン島嶼エンチャビ島に於テ敵ノ攻撃ヲ受ケ、死体ヲ收容セサルモ戦死ト確認セラレ候条此段及通告候也』とあるだけで、細部はまったく不明のままであった。

そのブラウン環礁の失陥が、実は一コ旅団規模の全島玉砕であること、を初めて知ったのは、戦後、札幌地方世話所勤務の先輩（五九期）を通じて入手した第一復員省発行の『死亡認定理由書』によってである。

終戦直後の札幌移転もあつたため、昭和二十三年夏頃の入手と記憶するが、私の知る限りでは、これがブラウン玉砕を初めて認定した最初の公

開文書と思われる。

ザラ紙にタイプ印書されたその文書は、今では古ぼけて茶褐色に変色した一片の紙切れでしかないが、戦時中心たすら秘匿された「離島玉砕」の事実が初めて公けにされたという点で、遺族たるわれわれにとつてきわめて重要な意味をもつ文書であった。

左に全文を掲載する(原文のママ)。

『死亡認定理由書』

海上機動第一旅団第三大隊

(駆三一三三)

一、生死不明となりたる日及び場所

昭和十九年二月二十四日マーシャル群島「ブラウン島」

二、生死不明となりたる前の状況

I 第三独立守備隊を基幹として編成されたる海上機動第一旅団(長、陸軍中将西田祥実にして歩兵三天隊、機関砲隊、戦車隊、工兵隊、通信隊、衛生隊を基幹とす)は、昭和十八年十一月三十日其の編成を完結し十二月十四日釜山発トラック島に於て第四艦隊司令長官の指揮下に入り、一月四日マーシャル群島「ブラウン島」に到着し該島の守備に任ず

II ギルバート諸島を奪回して勢を得たる米空軍は連日マーシャル諸島就中「クエゼリン」島に襲撃ありしも、二月六日其の機動部隊を以て遂に同島を奪取し、更にマーシャル各島に対して熾烈なる空襲を反復しつつ二月十七、八

日大挙トラック島我が基地を急襲すると共に、同十八日、大艦隊支援の下に「ブラウン」島攻撃を開始す

三、生死不明となりたる後の状況

I 二月十八日以後「ブラウン」島守備隊將兵は空に海に大敵の猛攻を受けつつ克く力戦奮闘皇軍の威武を發揮し、二月二十四日遂に負傷等に依り人事不省の為米軍に收容せられたる者数名を除き全員玉砕し、同島は米軍の領有に帰するの已むなきに至る

II 爾後「ブラウン」島に上陸せる米軍は陸上基地の構築補強に努むる等其の航空及び艦隊基地の推進を得て、爾來南洋諸島に侵攻す

四、採りたる搜索手段及び認定理由

前述のごとく「トラック」空襲の為速に「ブラウン」の状況確認するに至らざりしも、同月十八日午前十時「ブラウン」守備隊より――

「聖旨を奉じ敵を殲滅せん」と打電し來たり、爾後無線連絡なく十八日午前十時頃味方通信施設全く破壊せられたるものごとく爾後の状況全く不明なりしも、三月三日「トラック」島より二一空陸偵を以て偵察実施せし結果「ブラウン」島環礁内に大型巡洋艦二、駆逐艦五、輸送船大型七、中型四、油槽船四在泊し、飛行場にはB24一、小型機二九あり、尚二〇〇米滑走路造成中にして陸上に於て彼我戦闘の模様なし

尚、同月四、五日兩日の偵察に依れば多数の米軍大型船舶定泊中にして哨戒機約二〇機飛翔中 尚米軍側発表に依れば「ブラウン島」は二月二十四日完全に占領せるもの如し

五、以上総合し且つ海上機動第一旅団が一月四日「ブラウン」に到着後日浅く、資材の輸送遅延し防備築城謂うに足らざりし情况等に鑑み「ブラウン」防備部隊は、孤軍奮闘遂に二月二十四日一部を除き全員玉砕せるものと認定す
昭和二十二年二月

留守業務局長 菅井 斌磨

しかし、昭和二十二年といえは、まだ戦後の混乱期のさなかである。この「死亡認定理由書」が遺族も含めて、果たしてどれだけの人の手に渡ったかは、きわめて疑わしい。

現に、ブラウン玉砕戦を実際に戦った「陸軍守備隊」の存在は、一般にはその後も永らく知られることはなかったのである。戦後二〇年以上の間、ブラウン守備隊の「実像」がいかに不鮮明なものであったか――二、三の著作から引用してみよう。
昭和三十三年三月、『知られざる玉砕の島』と題して雑誌『丸』に掲載された伊東浩三氏の短文は、エニウエトク(ブラウン)環礁の玉砕を戦後の原水爆実験場としての新たな悲劇と交錯させて描いた読み物として、いまなお私の印象に残るものがある。

それは、次のような書き出しで始まっていた。(傍線筆者)

『エニウエトク(ブラウン)の米軍側の呼称』は、原水爆の実験場としてビキニとにも、世界の注目を浴びている余りにも有名な環礁である。このエニウエトクでは今

年もまた、水爆の実験が行われると伝えられる。ビキニの死の灰におびえる日本では、いまだに広島、長崎の原爆罹災者が二人、三人……と絶望のうちに命を消しているだけに、今日この環礁によせる関心は、世界の何人よりも大きく、また切実である。

このエニウエトクの美しい白珊瑚の小さな島々は、わが海軍守備隊三千四百名の紅の鮮血に染められているのだが、何故かこの事実は、戦争の最後まで国民には知らされないでしまっている。全員玉砕の悲劇の島であるにもかかわらず、他の島々が勇壮な「軍艦マーチ」の響きにのって大本営から発表されているのに、エニウエトクのみは、国民から全く忘れられた島になっていたのであった。しかも、この作戦に従軍したUP特派員リチャード・ジョンストンは「当時のアメリカは中部太平洋作戦の最も重要な基地を占領した」と報じていたほどであったのだが……。(中略)

エニウエトクの守備についていた指揮官青山英夫海軍大佐以下三千四百名は、この戦闘でアメリカ海兵隊に戦死者九六名、負傷者五五〇名、陸軍の戦死者七〇名、負傷二八名の損傷を与えて、白珊瑚の島々に散華したのであった。この二月はそれら英霊の十三回忌に当たっていたが、その悲惨な玉砕は、いまだにわれわれ日本国民には知られていないのである。

伊東氏の論評は、戦後米軍の原水爆実験の場となったブラウンの生々しい悲劇を踏まえながら、米軍側のその後対日戦略にとって決定的なテコとなつた対日進攻基地(ブラウン)の失陥



三ヶ根山上の慰霊碑（除幕式当日）

が、何故か隠蔽されたこと。総勢三千名を超える守備隊将兵玉砕の事実が何故か葬り去られたこと——に対する疑問と理不尽さの表明にあった。

その限りでは私もまったく同感であったが、その離島守備隊が三千四百名の「海軍部隊」だとする伊東氏の記述には、少なからぬ驚きと戸惑いを覚えたものである。

また戦後、大本営発表の「真相」を追い続けられた富永謙吾氏（元大本営報道部・海軍中佐）の著書『大本営発表・海軍編』（二七年六月三〇日初版）には、ブラウン玉砕に関し原文ではわずかず三行の記述があるにすぎないが、それでも、その玉砕戦を戦った離島将

兵は青山英夫大佐以下の「海軍部隊」と記されていた。

『尚、エニウエトク守備隊（指揮官海軍大佐青山英夫）三千四百名も圧倒的な兵力と鉄量の前に二月十七日、全員玉砕し、マーシャル群島作戦は終りを告げた。エニウエトクの玉砕は発表されなかった』

（三三二ページ／傍線筆者）

十数年後——、富永氏が再び発表された『大本営発表の真相史』は、その初版（四五年七月一日）の「まえがき」に「大本営発表は時によって虚報の代名詞のように言われ、非難と嘲笑を受けた。果してそうであったのか。この疑問に答えるため、あらゆる関係資料を検討し、その報道の実際と戦局を密接に関連させて展開した」とあるように、内容一新の好著であることは否定しない。

大本営発表から異例に除外された離島玉砕が二つあることも、この著書で初めて知った。前著では殆ど触れられなかったに等しいブラウン玉砕についても、新たに一項が設けられている。

【グリーン島とエニウエトク】

太平洋戦争は約一〇〇回のマキン、タラワのような水陸両用作戦で組み立てられている。更にこれを分けると、四四回のX日（日本側の大陸日の呼称）と、五九回のDデー（連合国側の大陸日の呼称）からなりたっているのである。前者は日本の進撃期間（九カ月間）、後者はアメリカ側の反攻期間（二カ年間）に行われたことは当然である。これらの上陸作戦のうち、大本営発

表で取りあげられないものが一四回ある。その理由は、別に取りあげる必要をみとめないほど小さいものであったからである。

ただし、例外がある。グリーン島とエニウエトクの玉砕である。両島の玉砕がマキン、タラワの玉砕と時期が同じであったため、当時状況が全く不明であったため、空しく埋もれることになった。

エニウエトク守備隊は指揮官青山英夫海軍大佐、兵力三四〇〇名。グリーン島守備隊は、和久馬海軍大尉以下約一〇〇〇名であった。（一九三三ページ／傍線筆者）

もつと驚いたのは、戦史中の白眉ともいわれる服部卓四郎著（元大本営陸軍部作戦課長）の『大東亜戦争全史』（昭和四〇年八月一日初版）においてさえ、その部分の記述に明らか混乱のあることである。永久保存版（昭和五五年九月二五日印刷、第一六刷）から引用しよう。

【ブラウンの失陥】

トラック空襲の惨害及び影響は前述の通りであるが、この空襲の真の目的はブラウン環礁に対する上陸の準備であったようである。即ちブラウンは一月三十一日以来殆ど連日敵空母機の空襲を受けていたが、二月十八日早朝からは敵の艦砲射撃が始まり、約一昼夜の猛砲撃の後、敵は翌十九日エニウエトク及びメリレンの両島に上陸を開始した。当時ブラウン環礁には第六十八警備隊を基幹とする海軍約二、〇〇〇名及び陸軍海上機動第一旅団主力約二、〇〇〇名の兵力が配置されており、全般の指揮には西田少将が当たっていた。但し両部隊とも一

月末に漸く現地に着したばかりで防禦施設の見るべきものもなく、両島の運命もまた自ら明らかであった。

かくして両島は二十四日完全に敵手に帰した。（五一九ページ／傍線筆者）

そもそも「海上機動旅団」の構想は、同氏が作戦課長時代に生まれたもの。したがって同旅団の所在に明らかなのは当然といえるが、全体の記述はなお正確さが欠けている。

ここにも「幻の海軍部隊」が登場するし、また環礁中唯一の飛行基地をもち、それ故にこそ米軍の最重点攻撃目標となった「エンチャビ島」（満州第八〇五部隊主力が玉砕）の存在は、何故か欠落している。

このように、戦史に権威ある人たちの著作ですらそうであったとすれば、一般的な認識の度合は推して知るべしと言わねばならないだろう。しかも、この種の誤認や混同は最新刊の「戦史本」の中にさえ、いまだに散見されるのである。

これでは、実際にブラウン環礁の玉砕戦を戦った将兵たちは、無名戦士以外の何ものでもなくなってしまうのではないか。

それというのも、この時期、それらの著作に登場する青山英夫大佐以下の海軍将兵は、ブラウン環礁には実在しなかったからである。

（以下次号）

△8頁より▽

そして何年か前の今日こそ、我が第二世として産声揚げし子の、記念すべき目出度い日なのだ。

今日とて別にこれとして要件もないのだが、其の日を迎えて独り心中に無事ならんことを祈る時、遂にペンを取る気持ちになったのだ。今日はこれ位にして止めます。

皆体に注意して、病気にかからぬ様にされ度い。

では第二回目の便りを終わります。

ひで子どの さようなら

百次郎

厚の誕生日である八月一日に書かれている。

報道によると、毎日のように海上を航行中の船舶が撃沈されたりして、戦局は益々激しくなってきた。広い海、いつ敵潜水艦の攻撃を受けるかわからない。手紙など果たして届くかと危ぶまれる。必要なことは二度三度書くように、とはこのことであろう。

○月○日

今日も元氣だ。南方第一線より三回目の便りを送る。全員元氣ですか。小さいアーチャンも今頃は大大大きくなり可愛くなって、人の顔を見てニコニコしているでしょう。

母港出発以来、便りに接していないので見当もつきません。それで君も元

氣でいるだろうね。もう間もなく別れて五カ月となる。花咲く春に別れを告げて暑い夏となった。会社の方からは出発前に話した通りの給与を、頂いておられますか。どうやら暮してゆけますか。自分の方は小遣いなど全く要らな

い。使う場所も機会もない。(中略) 美しい夜空だ。澄み切った空は何とも言えぬ美しさだ。君見る月も星も変わらねど矢張り大いに違う。奉天の空のように汚れていない。いっか君に、遠洋航海の時のこの話をしたことがあったね。この美しい夜空を君に見せたいと思う。送ってあげたいが、然うもならず…………。

今度は昼だ。晴れ渡った静かな海は日本近海には見られない美しさです。焼けつくような太陽の光がさんさんと照りつける時、どこからともなく、さらさらと涼しい風が椰子の木の間をすぎて吹いて来る。そして静かな海へと去ってゆく。遠く水平線の彼方に、黒い尾を曳いた雲の一点が漂う。それが次第に移動して行く。スコールの一群であろう。そのスコールを背景に、取り残されたものの如く白い帆をかけたカヌーが二つ、三つ、帆はふつくと風をはらんで水平線の彼方へと消えてゆく。そして再び太陽が輝き、もとの静けさに返る。どこで食うか、食われるかの戦いが続けられているかと思われるが、然し、こうした絵を見るような景色にもじっと目を注ぐ。静かな海

とは言え、戦時下だ。

これは見たままだが、今日はこんなことでも書かないと書くことがないのです。

余り長くなったからこの辺で止めよう。また暇を見て何とか書こう。

元氣で朗らかに暮らせ。さようなら

妻、ひで子へ 夫、百次郎

この日、僕の誕生日

手紙の日付は誰々の誕生日とか、何日前とか後とか私たちだけに分かる日を記している。夫の誕生日は八月二十五日である。

△中略▽

○月○日

今日も元氣だ。また書ける。

皆の者元氣でいるだろうか。当方も多忙な日々を送っているが、至極元氣だ。「米英撃ちてし止まん」。大いに頑張るつもりです。そなたはじめ子供たちの無事ならんことを祈っている。今日はこれで止める。

皆さんによるしく。第十八信なり。

ごきげんよう。さようなら

珍しく絵はがきである。軍艦旗が高々と翻っている絵が三色刷りで印刷されている。戦地からの便りで、はがきはこの一枚だけ。簡単な走り書きであった。そしてこのはがきの後は、音信に二度と接することがなかった。

昭和十九年に入って戦局は益々悪化

していることが察せられ、輸送も困難となったことがわかる。二月六日、マールシャル群島クエゼリン島玉砕との報が入る。それでも当方からは、今まで通りに手紙を出している。二月下旬に子供たちの写真を送る。毎日、戦地の夫からの便りを待った。長かった冬の寒さも緩み、いつしか日陰の雪も溶けて春が来た。

△中略▽

昭和二十年の二月二十七日。忘れることが出来ない、この日のことは。

この日、久し振りに白紬油の配給があり、一升瓶に半分程の配給を受けた。しばらくおしゃべりをし、一升瓶を手に喜々として家に帰ると、玄関で局の人が紙切れを手にして待っていた。それは電報であった。

「モモジロウ 一九ネン九ガツ一六ヒナンヨウグントウホウメンニテセンシ」

との公報である。これが私の問い合わせに対する返事であったのか。私は余りのことに電報を手にしたまま、へなへたとその場へしがみこんでしまった。まさか…………夫が戦死とは…………どうして、どうして…………。涙も出ないような強い衝撃に打ちひしがれた。

△以下割愛▽

(註) 本稿は筆者が出版された二四六ページ以下の同名の書物の中から、その一部分をとるところ抜き出したものです。

お便りの中から

東京都 鈴木 梅太郎

謹啓 先般は「会創立二十五年のあゆみ」を御恵送賜り感慨を新たに、また皆様方の御労苦の程を拝察致し深く感謝申し上げます。

扱て会員であった姉の福原キチは、去る六月二十八日に足立区内の勝楽堂病院に於て逝去いたしましたので御報告申し上げます。年齢満九十八歳十月、数え百歳でございました。

生前中は永い間大変御世話様になりました。誠に有難うございました。姉に代り厚く御礼申し上げます。

姉は三十一歳の時二児を抱えて夫と死別し以来苦勞を重ねて、育て上げましたが一人はクェゼリン島で、一人は海軍に応召し終戦の時無事復員したもののその後病没し一人身となりました。

近隣周囲の皆様方や施設の皆様等から、とても温かく見守って頂きながら何の苦しみもなく眠るが如くやすらかに逝かれ、これも靖国の御神様のおかげと感謝いたしております。

就きましては私も九十歳を越しましたので、会員としての継続は困難となりましたので、今後何年かの会費として振替にて金参万円御送り致しましたので、何卒よろしくお願い申し上げます。

す。

永い間ほんとうに有難うございました。会の運営に当って下さった皆様へ深く感謝いたしますと共に、益々御多祥であられますようお願い上げ、英霊の御冥福を祈りつつ厚く御礼申し上げます。

謹言 (故福原 キチ弟)

篤志会員 長谷川 栄 次

前略御免下さい。本日は洵に立派な『25年のあゆみ』をお送り下さいまして有難く存じます。次から次へと頁をくり広げる都度あの人の人の御名前が出て来て懐かしいやら又痛ましいやら、又これを刊行された世話人の御苦勞の程が紙面に現われ、その御苦勞がつくづくと感ぜられます。一口に25年と申しますが一年一年と各行事の実施会誌の発行、当事者の御苦勞がにじみ出ていますね。御遺族も定めし御喜びの事でしょう。この会は全国に会員が散らばっている為、何かと倍の力が要ること本当に御苦勞です。でもこんなに世話して下さいの方があればこそこんなに盛大になれるのです。どうぞ今後宜敷くお願いいたします。

篤志会員 長谷川 敏

拝復 七月早々に梅雨の中休みとなり、紫陽花も色褪せて参りました。

過日は、環礎、25周年記念号と、色刷り写真の入った美しい小冊子をありがとうございました。

亡くなられた方を偲ぶ皆々様の綿々たる文章に感動致しました。私が写しました日本人墓地の写真に對しまして、佐藤様の過分な註記が入っておりますが、果してこれ程のお役に立ったのかと汗顔の至りです。

それにしても御仕事の合間に編集などあれこれと大変なことですね。ところで同封のもの、貧者の一灯で僅かですが寄付させて頂きます。暑さに向かう折柄、御身体に御注意下さい。 敬具

特別縁故者 板垣 徹

拝啓 マーシャル方面遺族会二十五年のあゆみ、会員名簿頂戴致しました。

戦後四十余年の今日、変らぬ会の隆盛と会長以下幹部の皆様御御辱のこと御慶び申上げると共に深く敬意を表する次第でございます。

今更に御眷顧を戴いた林茂清閣下のことなどを想い浮べて感慨を覚えます。

同封の金子は些少なから『二十五年のあゆみ』御恵送賜りました御礼のしるしまでに貴会運営の経費の一端にでもと考える次第。御納めいただき度存じます。

更めて英霊に敬悼の誠を捧げると共に遺族の皆様方の御隆昌をお祈り申し上げます。 敬白

特別縁故者 村岡 達 志

拝啓 梅雨の折柄益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

この度は『環礎』と同記念号別冊『25年のあゆみ、会員名簿』をご恵送賜り誠に有り難うございました。

佐藤会長以下、役員の方々のご熱誠と並々ならぬご努力により見事な会の運営が続けられているかたわら、いつも乍らの素晴らしい内容の『環礎』と共にこのような立派な記念冊子が刊行されましたことに心からの感謝と敬意を捧げる次第でございます。

貴会の益々の御発展と会員皆様の御健勝御繁栄を切にお祈り申し上げます。

先づは取りあえず御礼まで申し述べます。 追而、些少で恐縮でございますが、同封の金子 雑費の一助にお加えいただければ幸いです。 敬具

姫路市 野村 盛 弘

拝啓 マーシャル方面遺族会25周年心から祝意を表します。その間の御苦勞並々ならぬ事があったらうと離島に散在する連絡統制の困難察するに余り

あるものがあります。

今日まで盛会を維持し『25年のあゆみ』を編集されました偉大なる業績に対し心から敬意を表する次第であります。この度環礁並びにその『あゆみ』を御送りいただき戦後も残された遺族の方々のことを思えば、よくも今日までと御同情申し上げるのは当り前乍ら只々敬意を表するのみであります。

読売新聞で『戦争』なる欄で既に三千六百回も遺族を中心とした記事が出て居ります。総て感慨無量の内容のものばかりです。盛会を祈ります。

佐賀県 山田 雪子

暑中御見舞申上げます。毎日うとうとらしい空模様が続いて居りますが御機嫌およろしく遺族会のために御尽力頂きまして有難く何時も感謝申上げて居ります。

唯々御多忙中、環礁並びに25年のあゆみ御刊行頂きましてわざわざ御送付頂きました事大変に嬉しく存じます。早速拝見致しました。朝日新聞の記事を読ませて頂きまして在りし日の想出が浮かんで参りました。一入感慨無量でございます。両親も草葉の陰より大変に悦んで居ります事と存じます。

今から詳しく拝読させて頂きます。私何のお役に立ちませぬ御迷惑ばかりおかけ致しまして申訳なく存じて居ります。一人者でございます何卒今後共

およろしく御導き下さいませ。ますます御暑さ酷しくなつて参ります。何卒御体大切にお過ごし下さいませ。有難く御礼まで、

静岡県 土屋 まさ子

前略御免下さいませ。大変長い事御無沙汰致してすみませんでした。会長様はじめ役員の皆様には御変りなく毎日忙しい日々をお過ごしでございましょうか。色々とお世話様になりました。有がとう存じます。厚く御礼申上げます。

さて此の間は25年のあゆみ会員名簿をお送り下さいまして本当に有がとうございました。全部読んでから御礼申上げようと思つてとうとう今日になりました。主人も四度召集され、その当時の思出がまぼろしの様によみがえつて来まして唯々涙ばかり思出されて来しました。でも本当に有がとうございました。一生の良き思出となる事でしょう。今は私もケイレンさえなかつたらよろしいのですが唯々皆様にお会い出来ないのが残念に思つております。伊豆の方においでになりました是非お立寄り下さいませお願い申し上げます。

佐賀県 中山 時野

昭和15年12月満鉄のハルピン鉄道局

に務めて居た主人に召集が来しました。入隊まで四、五日しかなく取るものも取り敢えず、荷物はあずけ帰り佐世保海兵団へ入隊、一週間余にて横須賀へ行き、明けて2月には南洋群島方面へ出発しました。

あれから四十九年になります。長い四十九年のようでもあり、ついで此の間の事のようにも思われます。

建築業をして居る息子が、肖像画のお店を出して居られる知人に、主人の肖像画を……と写真を持って行きました。此の頃出来上つて来しました。

届けた写真は水兵の時のものですが本人も身につける間もなかつたであろうし、私達も見ること出来なかつた下士官の服を着たものに仕上げてありました。

額を掛け替えて眺め上げ、昔の事を思い出して居る昨今です。

現地慰霊をかねてより考えておりましたが、思うようにならず今年は……と申し込んだところです。よろしくお願い致します。

福岡県 近藤 章

父近藤栄次は昭和16年12月7日召集を受けて海軍一等水兵で佐世保海兵団に入隊のあと、興亜に乗組み、その後昭和18年5月10日頃二、三日の休暇で帰って来しました。その時「今度は陸戦隊で南方に行くらしい」と言う言葉

を残して出て行ったきり、二度と元氣な姿を私達に見せる事なく昭和21年の春戦死の公報が入りました。

昭和19年の元旦、戦地からの便りに、現地の人も顔負けするぐらい日焼した、とありました。この便りが最後でその時父は三十七歳でした。

私達母子六人戦後の荒波にもまれながらも父の教えを受け継ぎ、どうにか人から後指さされる事なく今日までできました。

昭和31年家具製作の仕事を始め、昭和49年に近藤家具工業株式会社として全国に製品を出荷しております。

母シヅエは間もなく80歳になります。至極元氣にしております。

大阪府 中野 フヂエ

先日は『二五年のあゆみ・会員名簿』をお送りいただきまして誠に有難う存じました。ご立派な出来ばえを拝見致しながらさぞかし大変なお作業だったことと存じ上げます。亡き弟に供えながら涙を流しました。

会長様はじめ奉仕された役員の皆様へ深く感謝申し上げます。

大阪市 松宮 花子

一年に一度は靖国神社へおまいり致しますが必ず雨が降ります。タクシーの運転手に御主人の涙雨だと言われま

した。役員の皆様何かとお世話様になります。環礎、25年のあゆみ御送り下さいましてありがとうございます。右御礼まで、ありがとうございます。

山梨県 諏訪 完三

前略、この度は『25年のあゆみ』をお送り下さいましてありがとうございます。刊行については大変なご苦労をされたこととご推察しています。次の世代への貴重な資料として永久に保存いたします。

早いもので戦後四十数年経過しました。役員の皆様方もご健康に留意なさって、一日一日を大切にお過ごし下さい。右御礼まで。

静岡県 服部 くにゑ

長い長い雨もあがり久しぶりの青空に心途すっきりとした思いが致します。机に向かい乍ら庭を眺めておりますと昭和五十年に浮田前会長さんからおけて頂いた浜木綿の青々とした葉が風にゆれております。頂いた球根を大切に鉢に植えて育てておりましたら六月に入り緑の茎がズンズン伸び始めピンクの可愛い百合のような花が先端に一輪咲き、二・三日おきに一輪づつ計四つの花が南十字星のような形に咲き揃いました。

その時の感激は今以て忘れることができませぬ。そして毎年六月になると

忘れずに一本だけ茎を伸ばし四つの花を咲かせてくれます。

五十九年に東太平洋戦没者の碑が建てられた時は始めて二本の花が咲き、英霊のお喜びの声を感しました。

今年は一カ月遅く七月十三日に霊魂をお迎えするかのように一輪咲きました。同封の写真は七月二日、四輪揃ったところです。一年に一度だけで、丁度マーシャル遺族会の皆様にお眼に



かかるのと同じように楽しみに待たれます。会長様、役員の皆様くれぐれも御自愛下さいませ。かしこ

(註) この浜木綿は、マーシャル群島のルオット島の霊苑に咲いていたものを、徳原徳子様の御配慮により浮田名誉会長が持帰り、球根を増やしてお頒けしたものです。他の方々の所では如何でしょうか。お聞かせ下さい。

— 関連 『環礎』 22号12頁、24号20頁外

東京都 水野 はな

昨年よりの腰と足の痛みのため、六

三年二月の慰霊祭に参拝することが出来ず残念な思いを致しましたが、五月二日の靖国神社への慰霊碑台座の奉納式には、次男夫婦の手助けと、遊就館よりお借りした車椅子のおかげで参列させて頂き、皆様とごいっしょ出来たこと本当にうれしく思いました。式は厳粛なうちに和やかに進み、会長様初め皆様の見守る中、台座が安置され、続いて台座の中に、各島の霊

会則改正について

会長 佐藤 宗 丕

二月十二日の総会に、会則の一部改正を次の通り提案いたします。御意見のある方は一月十五日迄にお申出下さるようお願い致します。

会則改正案

一、第七条中「()」の中の「および給与」を削除します。

二、第十条第二項を削除します。

三、第十一条を次の通り改めます。

「第十一条(会費) 会員及び会友は、会費年額二千円を毎年定期総会の日迄に、新入会員は入会の時、その年度分を納入して頂きます。」

四、第十二条中「維持会費」を削除します。

砂を納めた桐箱が納められると、長男の戦死のした地クエゼリンに思いを馳せ、心引き締まる思いでした。神前に報告参拝致しまして、心爽かに帰ることが出来ました。

この夏の不順な天候にもかかわらず、あちこちの痛みも薄れ、九月には旅行に行ける程になりました。これもみな、英霊のお蔭と感謝致しております。

五、第十三条を左の通り改めます。

「第十三条(会計年度) この会の会計年度は、毎年十二月一日より翌年十一月三十日迄とします。」

六、各条章中の「および」を「及び」と改めます。

七、附則

この改正は昭和六十四年二月十二日から施行します。

改正の理由

一、会友制度の導入に際して、その拠出分担金を、会員の会費と区別して維持会費としましたが、誤解する人が多いので、何れも会費とします。

二、決算期を十一月末とすることにより、決算事務が効率よく処理されるようになります。

三、用語、表記の不統一を是正しました。

名簿訂正

(1) ◎ 昭和63年7月1日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
34	岩川 あい	戦歿地を、マロエラップに訂正
35	大場 こと	住所を、川内町仲崎と訂正
37	畠山 タカ	住所を、白沢字白沢411と訂正
37	渡辺 紀美雄	の次に新会員を追加
	西田 正尚	☎986 石巻市元倉1-20-20 ☎0225-95-0049 三男 西田祥実 ブラウン 3130
37	羽根川 明治	の次に追加
	加藤 カヨ	☎014 大曲市内小友下深山104 ☎01876-8-2504 妻 加藤清一 タラフ
38	石橋 サツキ	死亡により、石橋行勇(同住所 0245-82-2789 弟)が継承、戦歿者を石橋信政と訂正
38	石橋 節子	住所を北俣32と訂正
39	日出山 光	死亡により、日出山 武(同住所、長男)が継承
40	若狭 明光	の次に新会員を追加
	吉見 千寿	☎311-15 鹿島郡銚田町銚田1569-1 ☎0291-2-3520 姉 滝 千波 タラフ 佐7特
40	木村 恒三郎	戦歿者を追加、兄 木村長重郎 南洋群島 香取
41	関口 義太郎	住所を、増田町 698-2 と訂正
42	宇田川 ヒサ	☎を369-01と訂正
42	北原 ひで子	住所を、浦和市西堀5-7-9と変更、電話不変
44	実川 福松	死亡により削除
45	長沢 その	住所を大里2986と訂正
45	野沢 きくゑ	戦歿地を、クェゼリン 海軍軍属 と変更
49	関谷 シモ	続柄を妻と訂正
49	千野 七郎	住所を練馬区向山3-21-41と変更
50	土方 フジ	住所・電話を、☎198 青梅市青梅1082 ☎0428-22-4736 と変更
50	福原 キチ	死亡により、鈴木梅太郎(同住所、続柄 叔父)が、継承
51	森田 幸吉	死亡により、森田喜代(同住所、続柄 姉)が、継承
51	六軒 つる子	の次に追加
	渡辺 妙子	☎177 練馬区下石神井1-14-36 ☎03-997-0568 妹 本橋夏蔵 ルオット 752空
53	大槻 惣一郎	住所を、川崎市鋼管通り1-14-15と変更、電話不変
55	和田 芳治	の次に新会員を追加
	田中 菊枝	☎223 横浜市港北区新吉田町1111-9 ☎045-541-5028 妻 田中定雄 クェゼリン 孫呉70部隊
58	佐々木 久子	住所を、波並8-1-1 と訂正
60	末松 乙夫	☎を399-53と訂正
62	市川 市郎	住所・電話を、菊浜432-1 ☎0537-72-3663 と変更
63	三浦 染	住所・電話を、函南町平井1696-112 ☎0559-78-3412 と変更
63	安藤 昌子	電話以下を、☎0532-52-0062 妻 安藤米治郎 ヤルート 南海第一守備隊 と訂正
66	山田 道子	電話・続柄を、06-691-3688 次女 と変更
68	下地 政市	死亡により、下地 武(同住所・続柄 兄)が継承、☎08567-2-1971
72	片上 春茂	死亡により、片上ユキヨ(同住所・続柄 母)が継承、☎089853-3327
73	小松 千代美	住所を ☎782 香美郡土佐山田町栄町11-21 と変更
74	井上 静枝	死亡により、井上敏洋(同住所・続柄 子)が継承
74	川上 ミサオ	戦歿者を、川上 正 と訂正
75	近藤 シンゾエ	☎09448-6-4485 を追加
75	杉山 柳平	削除
78	植川 二男	住所を、竜田町弓削474-1 と訂正
78	鹿島 一樹	住所・電話・続柄を、袋町1-9 ☎0965-32-3864 兄 と訂正
80	塩月 チサ	死亡により、塩月鈴子(同住所・続柄 長女)が継承
81	富山 純幸	死亡により、富山フキ(同住所・続柄 母)が継承
82	座波 ツル	住所等次の通り変更 ☎900 那覇市楚辺2-20-19 ☎0988-55-7250
84	山下 治	の次に追加
	高橋 正吉	☎154 世田谷区世田谷2-12-17 ☎03-425-5511 横須賀鎮守府
	蹴揚 秀雄	☎039-05 青森県三戸郡名川町上名久井昼前12-5 ☎0178-76-2849 海軍軍属

1988. 7. 7



DEPARTMENT OF THE ARMY
HEADQUARTERS, U.S. ARMY KWAJALEIN ATOLL
BOX 26, APO SAN FRANCISCO 96355
7 July 88

マーシャル方面遺族会
会長 佐藤宗丕殿

米国陸軍クェゼリン環礁
技術兵団司令官陸軍大佐

リチャード G チャップマン

Mr. Munehiro Sato
Chairman of the
Marshall and Gilbert Islands
Bereaved Families Association
1-8-2 Nihonbashi Ningyocho
Chuo-ku, Tokyo, 103 Japan

Dear Mr. Sato;

In response to your letter of 23 June 1988, please accept my appreciation for the outstanding photographs showing your display of the Japanese cemeteries on Kwajalein and Roi-Namur.

It certainly looks like an excellent display and on my next visit to Tokyo, the Yasukuni Shrine will most definitely be on my agenda.

I might add, we at U.S. Army Kwajalein Atoll were honored to be of assistance in this very worthwhile project. Our countries must never forget the men and women who fought and died so bravely in their wars.

If we can be of help in the future, do let us know.

Sincerely,

Richard G. Chapman, Jr.
Richard G. Chapman, Jr.
Colonel, Corps of Engineers
Commanding

1988年6月23日付のお手紙を受け取り、あなた方によるクェゼリン、ロイ・ナムールの日本人墓苑の立派な写真をいただきありがとうございます。

今度東京を訪れる際には、きっと靖国神社に参拝することを私の予定に入れようと思います。

最後に、クェゼリン環礁の米国陸軍の我々は、この大層価値ある事業にお手伝いできたことを誇りに思っていることをつけ加えます。

私共は、戦争で勇敢に戦い戦死した人々を、男も女も決して忘れてはならないと思います。

もし今後、私共あなたの方のお役に立てることがありましたらお知らせ下さい。

敬白

マーシャル諸島情報

マーシャル・アイランズ・ジャーナル紙より

7月22日号より

『19歳以下が60パーセント』

マジュロ発・7月19日

マーシャル諸島の人口の60%が19歳以下であると統計当局より発表があった。全人口は4万1千人で60年前は、9千8百人であった。65歳以上の人は約3%で1285人。

島別ではマジュロが16019人、クェゼリンが9091人、アルノーが1917人、ヤルトが1874人、アイリング・ラブラブが1755人などで他の島は各々約千人位との事である。

8月12日号より

『マグロ豊漁』

マジュロ発・8月9日

マーシャル諸島の海洋資源の權威筋によると、マーシャル諸島は本年度、日本のマグロ関係水産会社との取引により90万ドル(約一億二千五百万円)以上の収益を挙げた。本マグロ年度は4月30日に終了したが、日本よりマーシャル諸島へ80万ドルの入漁料と10万5千ドルの製品及びサービスに対する対価がもたらされた。金額としては過去3年間とはほぼ同額である。

大型船の漁獲の45%はキハダマグロであり、本マグロは40%であった。本マグロは日本のさしみ向けに高い価格で取引された。小型船はほとんどがカツオでカツオぶし用である。

日本との契約によると入漁料は日本での魚価の約4%相当額となっている。

1987年の1月〜12月の漁獲量は4千8百81トン、86年は3千3百トン、85年は3千6百81トンであった。

8月19日号より

『司令官交代』

クェゼリン発・8月15日

2年間の勤務を終えたケゼリン島米軍司令官リチャード・G・チャップマン大佐と新司令官フィリップ・R・ハリス大佐の交代式が今朝ほど、記念教会北側広場で行われた。

8月19日号より

『駐米大使ワシントンへ』

マジュロ発・8月16日

ウイルフレッド・ケンドール氏の駐米大使就任宣誓式が昨日行なわれた。ケンドール大使は2年前よりワシントンに行っているが、今度米国の間で外友関係格上げの合意が成立したことにもない、正式に大使となった。マジュロでの休暇の後、来週ワシントンへ出発する。

(山口良二訳)

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

本部だより

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため
浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道

伊藤 フジ 白山光枝子

滋賀県

正野 きぬ

三関 ミン

池田 精治 大場 こと

京都府

大町 末子

青森県

池田 精治 大場 こと

大阪府

和田 和子

小笠原岩勝

伊勢 照男 西田 正尚

鳥取県

井上 照美

宮城県

相馬 ツキ 畠山 タカ

山口県

内富ミツヨ 下村チエ子

秋田県

赤塚 美正 秋保 十郎

徳島県

高砂 智久

山形県

石橋 節子 三浦 一郎

香川県

平井 正夫 上村コスギ

福島県

池田 ヒロ 堀江 誠一

愛媛県

井上ユキエ 井原トノヨ

茨城県

関口義太郎 森 ゆき江

長岡

俊夫

群馬県

鯨井 久八 幸島 敬一

高知県

小松千代美

埼玉県

久八 幸島 敬一

福岡県

一瀬クモエ 岩橋シマエ

千葉県

長沢 その

川上ミサオ

小林 繁幹 橋本マサエ

東京都

水野 はな 平石 ハツ

佐賀県

草場 マキ 宮崎 ツヨ

福原 ユキ

鈴木梅太郎 森田 喜代

長崎県

安達シヅヨ

神奈川県

遠藤 芳子 金子 武晴

熊本県

江口フジエ

田中トメノ

佐久間久次郎 高橋 梅子

大分県

橋本 良吉

新潟県

米田 トシ 藤田 ヨリ

宮崎県

森 フサエ 山内 キク

松岡 イキ

金山 深雪 佐野富美子

鹿児島県

丸田 キワ 富山 フキ

富山県

佐々木久子 三納 初子

会友

篤志会員等

石川県

黒川 正文 牛山 光子

井上

義夫 後藤 清見 長谷川 敏

山梨県

綾部はつゑ

板垣

徹 村岡 達志

長野県

牛山 光子

以上は六十三

年九月末までに寄付された八十名で金額の合計は二七七、三八〇円でした。

岐阜県

鳥本みさを

別送料二五〇円

尚、環礁合併本第一集より第四集ま

静岡県

田中 正美

別送料二五〇円

尚、環礁合併本第一集より第四集ま

在庫が若干数あります。
各々一部 一〇〇〇円 送料二五〇円
です。

○著書、寄稿文等寄贈のお願い

本を出版された方または雑誌、新聞等に寄稿された方は、コピーなりと寄贈頂けましたら幸せに存じます。

尚、近況、随想、思い出、会に対する要望等をお寄せ下さい。環礁に掲載させて頂きます。

○記念写真入用の方

六十三年二月十四日の慰霊祭の後、遊就館前で松平宮司様、大給湛子様と一緒に写した記念写真(キャビネ型)を一枚三〇〇円でお頒けします。振替用紙でお申込み下さい。

○訂正

49号23頁の「現地慰霊参加希望者」の中の「鐘ヶ江弘明」は、「鐘ヶ江敬介」の誤りでした。謹しんでおわびいたします。

○現地慰霊団の行動予定

厚生省主催の、マインシャル・ギルバート方面の現地慰霊は次の通りに実施される予定です。

期間 64年1月23日出発1月30日帰国
行先 マジュロ クエゼリン マロエ
ラップ ウオッセ タラワ

人員 約40名

(1頁より)

〒102千代田区九段南一―六―五

九段会館宿泊部

電話03―261―5522

変更の時は、本会にもお知らせ下さい。

◎第二〇回直会(なほらい)旅行会を本
会企画・日通旅行主催で次の通り実施
します。人員に限りがありますので、
お早目にお申込み下さい。

順路 靖国神社―熱海―箱根―東京
乗物 往復とも豪華な大型観光バス
宿泊 アタミ観光ホテル

〇五五七―八一―六二六六

△熱海駅より徒歩三分

費用 小学生以上 二万二千元

バス、宿泊、昼食二回を含む。

申込 一月十五日迄に住所、氏名、年

齢、性別を記入して本会にお申
込み下さい。申込順に受付けて

一月十五日の前でも五四名に達
した時締切ります。

同室御希望は出来る限り考慮し
ますのでお書添え下さい。

本会が受取った申込みは旅行主催会
社に取りつき、主催会社から申込者全
員に旅行に参加できるか否かを一月末
迄に通知します。

申込み後の取り消し、変更等は速や
かに左記主催会社に通知して下さい。
取り消しの時は先ず同社に電話をし、
本部にもその旨お知らせ下さい。

旅行主催会社

東京都千代田区大手町一―六―一

日本通運(株)大手町旅行支店

第四課 桐谷・沖井

〇三―二一六―三三三六

◎コース等 今年は、慰霊祭、総会の
あと、遊就館の遺品拝観があります。

一時頃靖国会館で昼食をとり、バスは
首都高速、東名道を一路熱海に向かい
ます。少し早目にホテルに入り、ゆっ
くりと温泉に浸りましょう。当ホテル
専用源泉は、熱海保健所の掲示によれ
ば、泉質は、カルシューム・ナトリウ
ム・塩化物質で、適応症は神経痛、

関節痛、慢性消化器病、冷え症、更年
期障害、慢性婦人病等々とのこと。湯
量は豊富で、透明・清冽、而も入浴時
間無制限というサービスは嬉しい限り
です。

遠慮、気兼ねのいらぬ仲間たちの
思い出話、身の上話の花が咲きます。
ビデオも何本か用意いたします。

翌十三日は熱海梅園で早咲きの梅を
鑑賞し、箱根山上で新春の富士山に相
対し、芦の湖を眺め、お昼は小田原市
風祭の「菜趣里すゞひろ」(〇四六
五―二四―三四五六)で懐石料理を賞
味いたします。

今回の昼食は過去二十回の直会旅行
に前例のない趣向です。

茶道の佗び、さびの境地に根ざして
発展、成長してきた懐石料理の幽玄、
繊細な日本の味はきつと共感と御満足
を得られることと思います。

東京駅帰着は午後六時の予定ですが

◎本会役員及び篤志会員(昭和六十三年十二月一日現在)

名誉会長	浮田信家	篤志会員	石井清
顧問	栗林徳五郎		大野克一
相談役	朝香孚彦		木ノ下甫
会長	佐藤宗丕		ジョン・ウイリス
副会長	佐竹エス		新藤岩男
常任幹事	田中雄吉		土屋太郎
同	晝間楽平		徳原徳子
同	秋本英郎		西村祐造
同	荒木常子		長谷川栄次
同	石谷典夫		長谷川敏
同	黒川誠		浜松恒雄
同	高橋功		本坪和昭
同	高林芳夫		松平永芳
同	山口良二		水本鉄二
同	柴崎晃		村瀬松雄
同	高橋鎮夫		森山喜久雄
同			山村要
同			横溝幸四郎

道路事情によっては延着もあり得ます
ので東京よりのキップは多少ゆとりを
とって下さい。

本号は特に発行日を一カ月繰り上げ
ました。

私どもは 只ひたすらに
天皇陛下の 一日も早い
御快癒を 八百万の神々に
御祈り申し上げております
マーシャル方面遺族会

本 部
〒103 東京都中央区日本橋人形町
一―八―二(泉商事ビル)
マーシャル方面遺族会
電話〇三―六六一―八七六〇番
FAX 〇三―六六一―六二四一